

(一 般 学級経営)

個々が伸びるための学級経営を目指して
～群れから集団へ～

大阪市立千本小学校 金 大 竜

1 研究主題設定の理由

児童が意見を練り合ったり、安心して自分の考えを表現したりすることができない。学習場面以外では、友達とのつながりが上手く築けない。掃除や給食の時間、自主的に活動できない。こういった場面があり、そのことを指導したり、話し合ったりしようとしても、人間関係の希薄化や価値観の誤学習、未学習があり、うまくいかないことが本校ではあった。放っておいても自然に児童同士がつながるということが困難になっていて、教員が授業や行事で児童のつながりをつくることを意識しなければ、児童同士の交流が見られなくなっているのである。

学級がスタートした時の児童の状態は、「群れ」すなわち、ただ集められただけの集団であり、協力や助け合いなどはほとんど見られない。そうした状況から、児童同士をつなげ、「集団（チーム）」にしていくことで、児童は安心して自己開放でき、意見を交流し、深め合うことができると考え、次の2点を研究の柱として取組んだ。

○つながりを深める授業の在り方をさぐる

○そうじ・給食・あいさつに取組む

2 研究の概要

(1) 群れから集団になるために

群れから集団に学級がなっていくために「織物理論」をベースに考えた。織物理論は、学級経営を「織物」を織っていくように考えたものである。織物を織っていく時には、まず縦糸を張らなければいけないが、ここでいう縦糸とは、教員と児童の関係である。教員と児童をつなげていくために以下のことを意識した。

① 知的権威のある楽しい授業を実践していく

② 児童との関わりを増やしていく

③ 児童に話している事を教員自らが実践する

次に、児童同士の横糸を張っていくために以下のことを考えた。

① 児童同士の意見の交流が多くある授業を行う

② 児童同士の関わりを増やしていく

③ 児童が主体の活動を増やしていく

また、児童一人一人がつながっていく状態を教室に作っていくことが大切であると考え、オープンクエスチョンや話型を教科の話合いとは別に練習する機会を設けた。話合いのスキルは定着するまでに何度も繰り返し練習が必要になるが、教科以外の普段の生活などで練習していくことで、児童も抵抗なく取り組むことができる。ペアトークは、「昨日の夕食について」や「犬か猫、どちらが好きか」など簡単な話題から取り組み始め、何度も何度も行うことで、難しいテーマでも根気強く話し合う姿が多くみられるようになる。その中で「マジックフレーズ」を指導し、児童の聞く力を育てるように意識した。聞く力を育てることで、友達の意見にしっかりと耳を傾けるようになり、児童同士の協力も多くみられるようになって考えた。

(2) 研究の実際

- ① 関わりが多くある授業を目指して
- ② 良い授業の共有化と授業評価シート
- ③ 掃除指導と給食指導のあり方
- ④ これまでの研究より
 - ・ 話型とつなぎ言葉の指導
 - ・ 話し方、聞き方の揭示
 - ・ 学びあえる集団づくり
- ⑤ 意見交流を活発にする研究討議会
 - ・ 学年ごとに授業をみる観点
 - ・ 拡大指導案とワールドカフェ、K J法を用いた研究討議

3 各学年の研究実践

- 第1学年 算数科「どちらがながい」
- 第2学年 音楽科「ひょうしをかんじてリズムをうとう」 - 『おまつりの音楽』
- 第3学年 道徳「家ぞくのために役立つよろこび」 4-(3)
- 第4学年 学級活動「協力し合って楽しい学級生活をつくる」
- 第5学年 算数科「小数のわり算」
- 第6学年 社会科「武士のおこり」
- 特別支援（わかば）学級 「ルールを守ってゲームをしよう」
「班に分かれて活動しよう」

4 研究の成果

- 各学年の研究授業では、児童同士の協同的な活動を多く取り入れた。インストラクションを丁寧に行い、可視化したり話し手が誰かがわかり、聴き手の意識を高めるためにトーキングチャームを用いたりした。すぐに成果は見られないが、児童が、話すこと・伝え合うことにためらわないことを目指し、指導を続けていきたい。
- 協同的な学習において、どのようなスキルや知識をつけるのかを教員が明確にもち、課題設定をすることと、活動中・活動後に価値づけすることが大事だということがわかった。
- 授業で話合うためには、基本的な知識の定着が大切であることがわかった。
- 児童が協同的な学習を進めるためには、課題設定と同時に、机の配置や児童が話しやすいような机上の状態、ミニホワイトボードの活用など環境設定が大事であることがわかった。
- 児童が授業でつながるためには、ペアで話したり、グループで話したりすることが必須である。本年度は、教員研修だけでなく、研究討議会でワールドカフェの手法を取り入れ、児童同士を繋げるための手法を実際に体験した。教員自身が体験することで、進め方や効果課題についての理解を深めることができた。
- 合同学年会や職員会議で、給食指導や清掃指導の方法や各教室でのシステム、問題点などを話し合うことができた。各教員が指導法を多く知ることができ、教室で実践することができた。また、合同学年で目標を設定することで、クラスを越えて、教員が声をかけるようになった。